
心の中の漂流者

藤沢侑麻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

心の中の漂流者

【Nコード】

N8796L

【作者名】

藤沢侑麻

【あらすじ】

ある人の恋愛の行方。

僕は海の上にかかる橋をぼんやりと歩いていた。風が寝不足の頭の中を潮の香りとともに通り抜け、さわやかな気分になさせてくれる。僕はこの海が好きだ。辛いこと、苦しいこと、何もかもを忘れさせてくれる。もうそろそろ君が歩いて来る頃だ。

僕たちが一緒に散歩する関係になったのは二ヶ月くらい前の話だ。僕はいつものように橋を歩いていた。ちょうど橋の真ん中でぼーっと海を眺めていたときに、彼女が話しかけてくれたのがこの関係のきっかけだった。そのときの会話は正直覚えていない。何気ない話だったんだろうと思う。二人の習慣が偶然重なって僕たちは毎日同じ時間に会って橋の上を散歩した。僕たちは毎日一緒に散歩をしているが、待ち合わせはしたことがない。散歩という暇つぶしにわざわざ待ち合わせをする必要がないし、どう誘えばいいのか正直言葉が見つからなかった。それに偶然重なった習慣ということも二人にとっては重要なステータスに思っていた。ただいつも別れ際に

「僕は明日も」

「はい。では、また」

というやり取りをするようにしている。彼女が遅れている日も僕は海を眺めて彼女を待っていた。いつの間にか僕は彼女を好きになっっていたみたいだ。でなければ、偶然という不確かなものに運命的なステータスなど感じないだろうし（いや、不確かだからこそであるが）、海を眺めるという口実で自分を誤魔化し彼女を待ったりはしないだろう。さらに、僕の彼女に対する好意を自覚させたのは、僕は彼女と一体何の話をしたのかあまり覚えていないということだ。覚えていることと言えば彼女の顔と服装と声くらいだった。恐らく心臓の音と彼女の顔しか見えていなかったのだらうと思う。今日は会えるのだらうか。会えるのならそろそろ来る頃だ。

「こんにちは」

彼女は白いワンピースを着ていた。彼女はいつも綺麗で清楚な格好をしているなと思いつながら自分のくたびれた服装を見て少し恥ずかしくなった。彼女はにっこりと微笑んでいた。

「そうそう、この間言ってたカフェ」

僕の家近くに小さなカフェがある。そのカフェで僕はよくコーヒーを飲むのだが、このコーヒーは薄くて、普段ブラックが飲めない僕でもブラックを楽しめてしまうほどである。そんなカフェをなぜ彼女に紹介したのかというと、ピザトーストがおいしいことと客が少ないので気を使わずゆっくりくつろげるからだ。一人で小説を読んだり書類を書いたりするにはもってこいの場所でお気に入りなのだ。

「行ってみただけど、あそこほんとにコーヒー薄いね」

行つたのなら是非、僕も一緒に行きたかつたのだが。ところでピザトーストは頼んだらどうか。

「私、小麦アレルギーで食べられないの」

しまった。テンションを下げてしまった。いや、確かあそのパンは米粉を使っていたはずだ。

「え？ そうだったの！？ 頼めばよかった」

ああ、もう少しで橋が終わってしまう。

「あつそうそう、この間カレー作って余つたから持って来るね」

それは、うれしい。僕は感情を外に出すのが苦手だが、このときは力いっぱい笑顔で喜んだ。そういえば、彼女は普段どんな暮らしをしているんだろう。

「もうそろそろ帰るね」

僕は橋が終わっていることに気がついていなかった。僕は彼女と最後のやりとりをすると、家路に着いた。

今日も仕事大変だったと思いつながら、僕は彼女のことを考えていた。昨日はどんな話をしたっけか。彼女の顔しか覚えていない気がする。確かカレーをもらえとかいう話が少しあった気がする。今日は会えるだろうか、そう思いつながら水を飲み、いつもの場所に向

かった。

しばらく時間が過ぎた。僕が海を眺めていると彼女は白いワンピースで僕のところに現れた。

「カレー、持ってきたの」

本当に持ってきてくれた。その場で食べてすぐにでも「おいしい」と伝えたい。まずくてもいいからおいしいと言いたい。

「今日は、少し遠回りしませんか？綺麗な砂浜におりられるんですよ」

断る理由などない。最近、橋だけの距離では短すぎると感じていたのは僕だけじゃなかったようだ。橋を抜けて角を左に曲がりしばらく歩くと砂浜に下りられる場所があった。僕と彼女は手をつないで砂浜を走った。帰り際に彼女は

「楽しかった、また来ましようね」

と礼儀正しくお辞儀をした。

僕はもう散歩が楽しみで仕方がなくなっていた。もう目的はただの散歩ではなく、彼女に会いに行くためになっていた。今日は珍しく僕より早く来ていたようだ。橋の真ん中で手を振っている。

「こんにちは。カレーどうだった？」

おいしいに決まっている。

「今日も行かない？」

断る理由などあるもんか。

あれ？ここはどこだっただろう。

「昨日も歩いたじゃない」

それはわかってるんだが、はつきりと思い出せない。

「ほらその角曲がると……」

ああ、思い出した。角を曲がると砂浜だ。少し遊ぼうと手を引こうとしたとき、手は空を切った。後ろを振り返ると彼女はいなくなっていた。

今日は会えるだろうか。昨日、彼女はどこに行ったんだろう。今日は来てくれるだろうか。そう思いながらお茶飲み、いつもの場所

へ向かった。

もうどれだけ待っただろうか。なぜ来ないんだろう。昨日はなぜ急にいなくなってしまったんだろう。もう会えないのだろうか。そんなことを考えているといつの間にか夜が明けていた。

僕は家の近くのカフェで友人に会っていた。

「お前昨日眠れなかっただろ」

僕の顔を見るなり言ったところを察するに、目の下にクマでもできてしまっているのだろう。

「ああ。あまり眠れなかった」

「だろうな。目の下にくまできてるぞ。歌舞伎やな」

「歌舞伎ゆーな」

「体弱いくせにさっさと寝ろよ」

「眠れないんだよ」

「不眠症か？」

友人はコーヒーをすすりながら、「冗談交じりに少し笑いながら言った。

「ああ。不眠症になった。睡眠薬がないと眠れない。でも、最近あまり効かなくなってるんだ」

「冗談だろ？」

「本当だ」

「いつから不眠症なんだよ」

友人から笑みが消えていた。

「少し前だ。今から大体二ヶ月前くらいかな」

「二ヶ月前？」

「ああ」

「なんか悩んでんだったら俺に言えよ」

「もう終わりにするよ」

「何がだ？」

「仕事も全部」

「まあ、不眠症になるくれーなら仕方ねーよ」

友人はコーヒーをまずそうにすすった。

その日、僕は酒を飲んだ。

「今日で終わりにしよう。僕も夢の中の住人になるよ」

そう呟くと酒を一気に飲み、いつものベットへ向かった。すると、橋の上に彼女がいた。

「ねえ、僕と結婚してくれないか？」

「ええ。今までここに来るのを待ってたのよ」

僕はもう深い深い眠りについていた。手元には空き瓶と大量の錠剤が散らばっていた。僕は夢の中に消えていった。夢の中の彼女と一緒に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8796/>

心の中の漂流者

2010年10月8日14時44分発行